今週の
倫理

2026. 11. 14〜11. 20

11 月のテーマ ｜ 良書に学ぶ

1516号

先人が教える 中だるみ克服の極意



「十年一昔」とは、十年も経てば世の中の様子が大きく変わり、過去を「昔」と感じるほどになることを表わす言葉です。

しかし近年では、十年前を大昔のように感じる人も少なくありません。もはや「三年一昔」と言われるほど、技術革新は進み、経済状況や人々の価値観も目まぐるしく変化しています。

このような時代に企業が生き残るには、変化に応じて新たな手段を取り入れる一方、時代が変わっても守るべき本質を大切にすることが重要で、両者のバランスを保ちながら事業を進めることが求められます。

さらに重要なのは、企業のリーダーである経営者自身が学び続け、成長し続けることです。変化の激しい時代において、リーダーが歩みを止めれば、その流れに取り残されかねません。

そうした中で特に注意したいのが、「中だるみ」の時期です。何かを継続しようと決意しても、途中で飽きが生じたり、決意が揺らいだりして、志半ばで終わってしまったという経験は誰にでもあるのではないでしょうか。

しかし、中だるみの時こそ重要な局面であり、成長への分岐点ともいえます。嫌になったからといってそこでやめてしまえば、向上や成長は止まります。一方、それを乗り越えれば、それは前進の証です。つまり、嫌になる瞬間は進歩の直前であることも多いのです。

とはいえ、中だるみは誰にでも訪れるものであり、努力の大敵です。では、それを防ぐにはどうすればよいのでしょうか。

倫理研究所の創設者・丸山敏雄は、中だるみへの日頃の備えとして、「体験者の教えを聞くこと」が大切であると説きました。その具体的な方法として、「良き友を持つこと」「良き師を得ること」に加え、「良書を読むこと」を挙げています。

特に人物の伝記を読むことを勧めており、その人物が成功者であっても失敗者であっても、そこには先人の尊い体験が記されていると述べています。そして、伝記を通じて、「努力を一貫して続ける者にこそ成功がもたらされる」という人生哲学を培うことができるとも語っています。

また、先人たちの経験に触れることで、心が前向きになり、さらなる励みを得ることができるとも述べています。

書中の人物の、すさまじい努力が、いつも自分を激励してくれる。或時は、我が友となり、或時は我が師となって、いつもいつも傍を離れず、教へ、励ましてくれる。

（『丸山敏雄全集 第二十四巻 上』）

多忙な日々の中で、ゆっくりと読書の時間を確保することは簡単ではないかもしれませんが、隙間時間を活用し、少しずつでも毎日読み続ければ、その積み重ねはやがて大きな成果となるでしょう。

まずは、〈一日 〇〇分、本を読む時間をつくろう〉と決意することから始めてみてはいかがでしょうか。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局